

個のよさが生きる学習指導の工夫

— 集団跳び箱運動を通して —

糸満市立米須小学校教諭 仲 村 秀 也

目 次

I 研究テーマ設定の理由	21
II 研究仮説	21
1 基本仮説	21
2 作業仮説	21
III 研究の全体構想図	22
IV 研究内容	23
1 「個のよさが生きる」とは・・・	23
2 教材づくりの意義と方法	23
3 教材づくりの実際	24
V 授業実践	27
1 単元指導目標	27
2 単元の指導計画	28
3 本時の指導目標	28
4 検証授業の考察	29
VI 研究の成果と今後の課題	30
1 研究の成果	30
2 今後の課題	30

個のよさが生きる学習指導の工夫

～ 集団跳び箱運動を通して ～

糸満市立米須小学校教諭 仲村 秀也

I 研究テーマ設定の理由

国際化・情報化・高齢化等めざましく社会が変化していく今日、人々は、健康と体力への関心が一層強くなってきた。その関心は、単に旺盛な体力をつけるのではなく、優れた技能を習得するでもない。体育的に考えてみると、それは「豊かで賢いスポーツライフを営む実践力」を育てることとされている。そのことは又、生涯体育・生涯スポーツへつながるものである。その基盤は、子どもの頃から運動に親しむ元気な子に育てることにある。そのためには、学校における教科体育の中で、運動の楽しさや喜びを味わわせる体育授業の創造が大切である。

体育の授業における跳び箱運動は、「できる」・「できない」がはっきりし、「個人差」が顕著に現れる運動である。本学級24人のうち、跳び箱運動が「好き」と答えているのが18人、「嫌い」と答えているのが6人いる。嫌いの理由は、「うまくとべないから」・「友達に笑われるから」となっている。

これまでの教科体育では運動の特性にふれることが強調されてきた。子どもたちの様子を観ると、一生懸命な子は自分のめあてにむかってもくもくと練習を続ける。課題意識の弱い子は、自分の活動が持続できない。また、同じ場で練習していた友達が別のめあてに変わると、最後まで続けることができない。逆に、好きな友だちと同じめあてにするなど、一人ひとり（個）のよさと仲間（集団）との関わりを生かした学習活動が、十分になされていなかった。

これからは、仲間を思いやり、認め合ったり、共感し合いながら、子ども一人ひとりが課題を追及する授業づくりに努めることが大切である。その際は、「子どもが運動を楽しんでいる授業」「豊かな人間性を培っていく授業」のための「教材の開発」が必要になってくる。

教材設定にあたっては、下記の三つの「キョウカン」を考慮しながら、教材を位置付けることとする。

- 自分のめあてにむかって活動することが、仲間とともに活動することにもなり、仲間とともに活動することが自分を見つめる機会となる（共汗）。
- 自分たちの創意を生かした運動を友達と見せ合う（共観）
- 自分（個）のよさを生かすことが仲間（集団）の喜びとなる（共感）

このような観点から、跳び箱運動の特性を生かした『集団跳び箱運動』の教材化をすることで、個と集団が相互学習できるような支援をすることによって、個のよさが生かされ、運動の楽しさを広げて味わえると考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

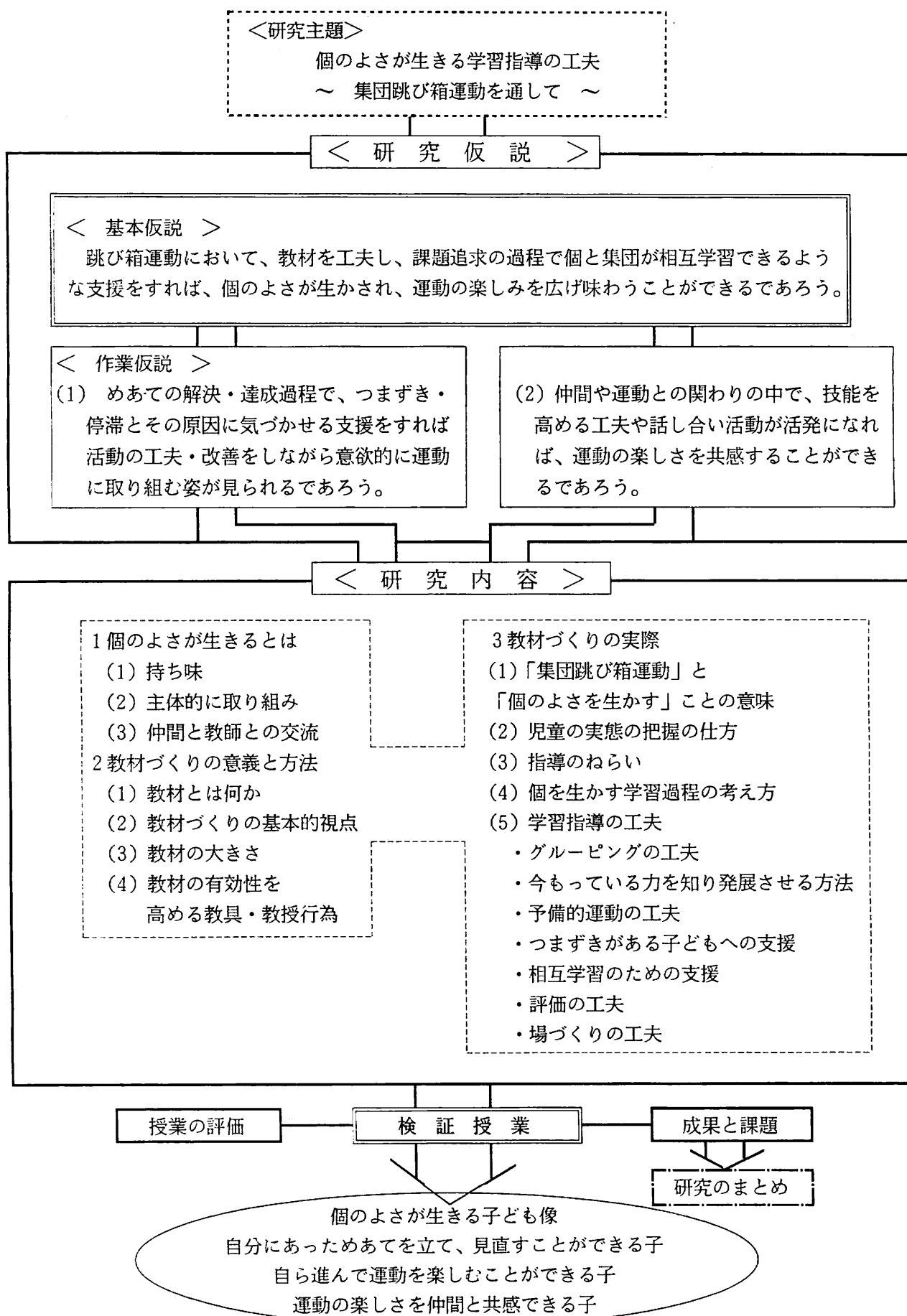
1 基本仮説

跳び箱運動において、教材を工夫し、課題追求の過程で個と集団が相互学習できるような支援をすれば、個のよさが生かされ、運動の楽しみを広げ味わうことができるであろう。

2 作業仮説

- (1) めあての解決・達成過程で、つまずき・停滞とその原因に気づかせる支援をすれば、活動の工夫・改善をしながら意欲的に運動に取り組む姿が見られるであろう。
- (2) 仲間や運動との関わりの中で、技能を高める工夫や話し合い活動が活発になれば、運動の楽しさを共感することができるであろう。

Ⅱ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 「個のよさが生きる」とは・・・

学習の場面で、一人ひとりの子どもが、自分の持ち味を発揮しながら主体的に取り組み仲間や教師との交流によって高まっていくこと。

(1) 「持ち味」

一人ひとりの子どもが持っているその人らしさ、その子どもなりのよさのことである。一人ひとりの子どもには、技能的に優れる者、思考的に優れる者、潜在的な能力をひめている者、学習経験などさまざまな違いがあるが、課題解決にむけて自分の学びを支える個々の「持ち味」である。

(2) 「主体的に取り組み」

子ども一人ひとりが意欲を持って課題について、見通しを持ち自分で追求し、解決を図っていくことである。体育においては、課題解決学習や思考錯誤的な体験学習を取り入れ、そのために活動する時間と場を設け、教材の工夫、多様な学習形態・学習活動の工夫を行い、学ぶ力を身につけさせることが大切である。

(3) 「仲間と教師との交流」

その子の持ち味は、仲間と教師との交流の中で明らかになっていくものである。そのためには、子どもと子ども、子どもと教師の間に信頼関係にもとづいた、温かい支持的雰囲気のある集団であることが交流で高まるための基盤である。そこから、お互いのよさを認め合い、学び合いが生まれる。

2 教材づくりの意義と方法 （『体育の授業を創る』高橋健夫編）

(1) 教材とは何か

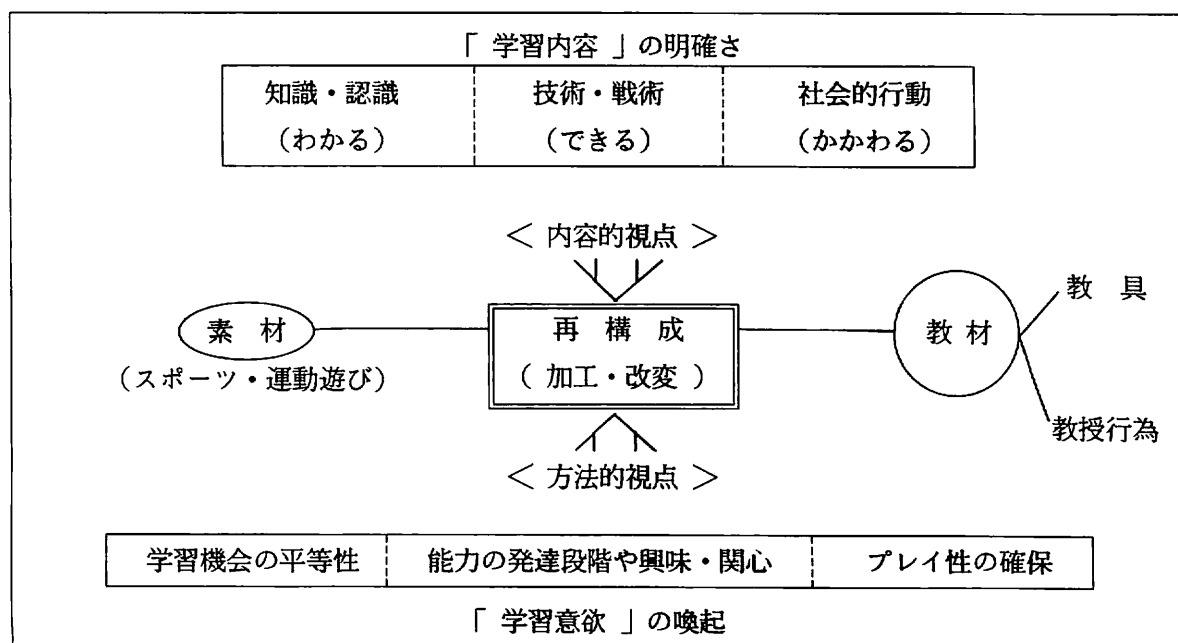
体育教授＝学習過程において、教師が子ども（学習者）に学習されることを期待して用意した教育的に価値のある文化的内容を「学習内容」とする。子どもたちに、学習内容が豊かに習得されるためには、その手段的機能を担う「教材」が用意されなければならない。

教材とは、学習内容の習得をめぐる教授＝学習活動の直接の対象となるものとする。

(2) 教材づくりの基本的視点——「よい教材」とは何か——

教材づくりは、図1に見られるように学ばれるべきものは何かといった内容的視点の検討を踏まえながら、同時に子どもの学習意欲を喚起していく方法的視点からも工夫される必要がある。

図1： 体育の教材づくりの過程とその内容的・方法的視点



(3) 指導のねらい

- ① グループやペアで協力し、互いに教え合い、励まし合いながら楽しく学習できるようにする。
- ② 自分の能力にあっためあてを持ち、技の習得や向上をめざし根気強く学習できるようにする。
- ③ 集団での演技構成を考えたり、実際の演技を高めたりすることができるようにする。

(4) 個を生かす学習過程の考え方

① 【今もっている力の考え方】（一人ひとりの個人差に対応できる楽しみ方を保障する）

「今もっている力で楽しむ」ということは、すぐにできるようになった技のうえに、そこにわずかな難しさを伴った課題に挑戦することを意味する。このような課題の設定の仕方の一つは、物的な克服的課題を負荷することである。跳び箱運動の場合、次のような課題で楽しめると考える。

ア 跳び箱の向きや高さを変える・・・技の習熟をねらった学習指導を意味する。

イ 調節板の枚数増やし・・・どこまで踏切り板の位置を遠くに離して跳び越すことができるかに挑戦する。第一局面を雄大に跳躍するという課題である。

ウ ゴムひも跳び越し・・・第一局面の脚部の大きなはね上げをねらった課題である。

エ めあて着地（遠くに）・・・着地点が跳び箱から遠くに離れるということは、着手から着地までの第二局面が雄大（次元の違う飛翔感を味わう）であることを示す。

オ できるようになった技を組み合わせる・・・今もっている力で十分に楽しむことである。

② 【できそうな跳び越し方に挑戦する力の考え方】（個の多様な発想を生かす楽しみ方を保障する）

器械運動はできそうな技に挑戦し、技を達成するところにそのおもしろさの中心がある。子どもにとって挑戦的な課題にするためには、「一連の動き」として技の組み合わせを工夫したり、連続して演技できることであると考え。

ア 連続開脚跳び・・・横向きに設定された複数の跳び箱をリズムカルに連続して跳ぶ。着地と次の踏切りを途切れることなく連続跳びを行う。

イ 2～3種目の・・・異なった技を用いて広い間隔で設定された複数の跳び箱を一連の動きで、組み合わせ跳び　　リズムカルに跳び越す。

ウ 集団演技・・・一人で行えば簡単な運動でも、みんなが呼吸を一つにして行うことは大変難しい課題である、そこにさまざまな創意と工夫が必要になる。それぞれのメンバーが、それぞれ自分のできる技を用いて集団でリズムカルに連続して跳び越し、演技として発表することを課題とする。また、縦列に跳び箱を設定し、異なった技を一定間隔にリズムカルに連続して跳躍することを課題とする。

(5) 学習指導の工夫

① グループINGの工夫（個を支える仲間）

編成は、男女混合で人間関係を配慮し、できるだけ、自分たちでグループの仲間を決めさせる。特に技能の低い児童には仲のよい友達や協力的な態度が身につけている児童を組ませるようにする。そうすることでより積極的な学習が見られると期待する。



写真1 男女仲良く学びあい

② 今もっている力を知り発展させる方法（個の主體的な追求）

授業の中では、「運動観察」を重視している。自らの運動をじっくりと内側から見つめ（自己観察）しっかりと把握する。そして、自分の今の運動を他からのアドバイスと比較して修正しながら実施する。また、共に練習する友達の運動をみつめ（他者観察）、その成功例・失敗例の原因を分析・思考し、自分の運動に役立てる。このような意図的な運動観察をもとに自分自身の運動を把握

し、運動の修正・発展の方向を探っていくことこそ「今もっている力」を知る方法であり、さらには、主体的な学び方、楽しみ方の発見につながっていき、また、その積み重ねが重要となる。

③ 予備的運動の工夫(個のよさ認め合う仲間)

子ども全員が、跳び箱運動を楽しむための技能を確実に高められるよう、基礎・基本的な技術感覚に類似した運動・基礎的な能力に関わる運動を豊富に経験させることを考えた助走・踏切・着手・回転感覚・着地・腕支持感覚・バランス感覚・逆さ感覚などを個人で、ペアで行うことで、調子を合わせることの楽しさや体のしくみに気づかせる。



写真2 ペアで心と体をほぐす予備的運動

④ つまづきがある子どもへの支援(個をささえる教師の支援)

いくら努力してもなかなか上達しない子どもが出てくる。そのような子どもは、除々に意欲も欠いてくる。そこで、教師は、「指示、発問、助言、賞賛、激励、しった、示範」などの働きかけを行う。その時は、子どもの気持ちや行動を観察して、明確な指示をだすことが大切である。

ア 今日の課題は何なのかを把握させる。

イ 自分の取り組んでいる技を習得するまでの過程と、今どの段階にあるのかを気づかせる。発問は、「踏み切りは、どのようにするのか。」「手の着き方は、どうするのか。」等、焦点化する。

ウ 向上している点を指摘し、これからの改善点を理解させる。

エ 課題が達成したら、どの課題に挑戦するかという次への見通しをもたせる。

オ グループのめあてと個人のめあての調和を連続性との兼ね合いから構成することを示唆する。

⑤ 相互学習の支援(個と集団をささえる教師の支援)

互いに協力する態度や、雰囲気、相手の意見や考えを尊重し、自分の考えもしっかり持つことが、話し合いをすすめるうえでの基盤となる。

第一に、他のグループの「課題(こだわり)」をしっかり受け止める。課題の共通理解があれば、どこを、どういう風に観察し、評価するのかの見通しが持てる。運動を見る目を育てる。

第二に、他のグループの活動を観て、その子なりのよさや見つけた課題・解決の視点等を教えて上げられるように、実際に関わりながら支援する。また、学習資料の活用も大事にする。

第三に、連続跳びや集団跳びのグループの工夫やコツなどを共有できるように認める場面を大事にする。その際の個のよさを認める声かけが大切となる。

⑥ 評価の工夫(個を生かす評価)

ア 技能達成一覧表により、知識・技能の到達度や進歩の程度が、子ども自身にもわかるようにし、この面をきちんと評価し、フィードバックして動機づけを高める。

イ 目標から、過程、結果までの学習課程が自己評価できることによって、子ども自身の中に学び方・意欲・満足感等が得られる。方法としては、「文章法」を取り入れる。「子どもの自覚」が理解できる。次に、「何に向かって、どのように努力するか」という形成的評価に心がける。

ウ 情意面の評価の観点・・・「気づく子どもであるかどうか。」

「能動的な子どもであるかどうか。」

「応用できる、使ってみることができる子どもかどうか。」

エ 個性的な能力の発見・・・幅広い観点から、一人ひとりの子どもの長所を見つけ、実際の活動場面で認める。

⑦ 場づくりの工夫（個の課題追求の場と時間の保障）

跳び箱の置き方、跳ぶ方向、リズム・タイミング、技の構成などを考えた場づくり

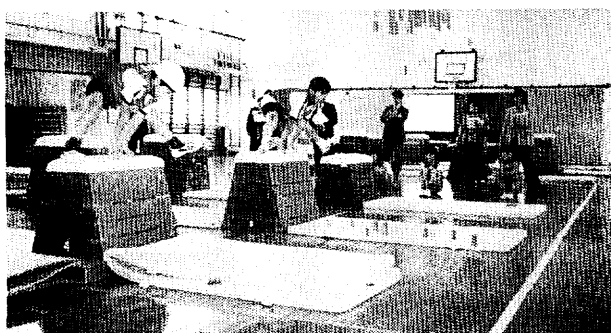


写真3 (横) ペア開脚跳びの場



写真4 (縦) 集団開脚跳びの場



写真5 跳び越し方の組み合わせの場



写真6 集団抱え込み跳びの場

V 授業実践

1 単元指導目標

(1) 価値目標

「克服・達成+表現」の跳び箱運動の特性や楽しさを味わわせるために、今できる跳び越し方や努力すればできそうな跳び越し方を生かし、さらに集団として調和ある美しい跳び越し方を表現できるようにする。

(2) 観点別評価の規準

観点	めあて①の学習	めあて②の学習
関心	・今できる跳び越し方でいろいろな跳び箱に挑戦しようとしている。	・少し努力すれば、できそうな跳び越し方に挑戦しようとしている。
意欲	・友達と約束を守って取り組んでいる。	・友達を認め合い、高め合って活動している。
態度	・場の安全に気をつけて取り組んでいる。	・約束や安全な場づくりに気をつけて取り組んでいる。
思考	・今できる跳び越し方のめあてで、いろいろな跳び箱に挑戦している。	・少し努力ればできそうな跳び越し方のめあてをもって活動している。
判断	・グループの演技構成を考え、自分の技のポイントに気づいて活動している。	・学習資料から練習の場や技のポイントに気づいて、できばえや演技を高めながら活動している。 ・技の構成がわかり、助言や補助をしている。
技能	・今できる跳び越し方で、動く速さ・リズム・タイミングに気をつけて活動できる。	・できそうな跳越し方でグループ全員が速さ・リズム・タイミングを合わせて演技することができる。

2 単元の指導計画

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	集合・整列・挨拶・準備運動									
	予備的運動・慣れの運動							・めあて① ②選択		
10	・学習のねらいと進め方を知る めあて① 今できる技を確かめよう	・めあて① 今できる技をより上手にして楽しもう 《基礎学習・共通課題》 開脚跳び・かかえこみ跳び・台上前転 集団跳び箱運動をして楽しもう 《基礎学習・共通課題》								できる技やもう少しでできそうな技に挑戦して楽しもう 《発展学習・グループ個人課題》 《発表会》 集団跳び箱運動をして楽しもう 《発展学習》 ・グループ課題
20										
30										
40										
	今日の発見・感想 次時の予告・あいさつ									

3 本時の指導計画

(1) 単元名 「器械運動」跳び箱運動

(2) 本時の指導目標

今できる跳び越し方や練習すればできそうな跳び越し方で、集団跳びを表現することを楽しむことができる。

(3) 授業の仮説

① 練習活動の場面で、集団演技の視点を明確にし、技への理解を深める支援をすれば、意欲的な活動（達成する喜び）がみられるであろう。

② 集団演技の発表の場面で、相互学習できるような支援をすれば、運動の楽しさ（表現する喜び）を共感できるであろう。

(4) 展開 (9/10)

過程	学 習 活 動	教 師 の 支 援 ・ 評 価
はじめ 5	○めあての確認をする。 ・上手になりたい技のポイントを発表する。 ○準備運動をする。 ・心とからだをほぐす。	○自分のめあてとグループのめあてについて発表させる。 ・教師の指示にしたがい、自分にあった心とからだのほぐしをする。
なか	めあて1・2 今できる跳び越し方や練習すればできそうな跳び越し方に挑戦して楽しむ。演技にを自覚して活動する。	○安全やマナーに気を付けて活動するよう声かけする。 ○技のできばえの相互学習（評価）を支援する。
か	自分のめあての技のポイント 「開脚跳び7段を高く跳びます。」 ・助走、踏切、第一空中姿勢、着手、第二空中姿勢、着地、	「このめあてで、うまくいきそう？」 （つまづきに気づかせるようにしむける。） ・運動の構造のどの場面につまづきがあるのか気づかせ、その解決方法を考えさせる。

35分	「開脚跳び7段を高く跳びます。踏切を強くできているか見てください。」 「高く跳ぶためには、踏切るときの1歩手前での工夫が必要なんだ。」	・学習資料を活用して、つまずきとその解決方法に気づかせる。 ・工夫した場で、つまずきを解決する方法で試してみる。 ・思考の過程や活動の状況を認め、評価してあげ、できばえに関心をむけさせる。
な	○集団跳び箱運動をして表現を楽しむ。 集団演技するときのグループのめあてを確認して、演技する。 Aグループ 開脚跳び—台上前転—仰向け跳び	○集団跳びのできばえの相互学習（評価）を支援する。
か	「リズムにのっての連続跳びをします。」 Bグループ	・演技するグループはどのポイントに気をつけて、こだわって演技しているのか？ ・そして、それはうまく表現できているか？
35分	Cグループ Dグループ	・どんな工夫が見られるか。 《写真7 学習を振り返る》 「スタートをそろえるように声をそろえているのがよかったです。」 「みんなの空中姿勢がそろってきれいです。」 「みんな同じタイミングで跳んでいました。」
まとめ5分	○今日の学習を振り返る。 ・学習カードに今日の発見を書き込む。 ・学習の発見を発表し、みんなで共有する。	○今日の学習の発見を発表させる。 「○○○の工夫をしたら○○○ができるようになった」などの発表ができるようにさせる。 ・本時の学習活動を、次時の活動へとつなげられるようにまとめる。



(5) 評価

- ・集団跳び箱運動を楽しんでいるか。【関心・意欲・態度】
- ・集団での演技構成を考えたり、実際の演技を高める工夫をして、活動しているか。【思考・判断】
- ・グループ全員が動く速さ、リズム、タイミングを合わせて演技することができたか。【技能】

4 検証授業の考察

(1) 仮説1の考察

技への理解を深める支援としては、【助走・踏切・第1空中姿勢・着手・第2空中姿勢・着地】のどこにつまずきがあるのか指示を与え、活動の実際の場面で学習資料の活用のし方を指導し、さらに教師の発問、指示など、関わりをもちながら進めた。「ふみきりの工夫で・・・」という自分なりのめあてを意識しているかという点でも個人差やグループ差がみられた。めあての立て方には、跳び箱の技の系統図を示し、「開脚跳びのふみきを強くふみきって跳んでみる（①技の②ポイントを③工夫）」と指導することで少しずつ分かってきた。それで、意欲的に活動する児童もみられた。しかし、グループの集団演技の共通課題の捉え方に差があった。そこで、全員にヒントカードを提示し、ワークシートへ記入をさせ、自分の課題を理解できるように支援した。すると、場づくりを工夫することでつまずきへの解決を目指して活動する子どもがふえてきた。ところが、個人のめあてとグループのめあての二つのとらえ方ができず、とまどいもあったと思われる。

改善点として、

- ① できる技への物的な克服的課題の負荷の方法を提示し、今持っている力で十分に活動させる。そのことで、集団の中で個のよさを認め合う場面を多く引き出し、集団演技につなげる（視点）課題をしっかりと捉えさせる。
- ② 初歩の段階では、集団演技の技を共通課題として提示し、取り組む。

(2) 仮説2の考察

集団演技の発表の場で、相互学習の視点が十分理解されていないため、集団演技するときのできばえへのこだわりがあまりみられなかった。技の構成(組み合わせ)やリズム・タイミングなど、どのポイントを【助走・踏切・第1空中姿勢・着手・第2空中姿勢・着地】、どんなめあてで表現しようとしているか、しっかりおさえられていない。グループ内で、相互評価の視点も分担して練り合う場面を意図的に仕組むなどの支援が必要であった。

改善点として、

- ① ビデオ機器の活用で、自分のグループの演技を振り返る機会をつくる。
- ② 子どもの具体的な活動にそくした適切な発問「ためす」「取り組む」「確かめる」を投げかける。等の工夫が必要である。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 課題追求の過程において、個を生かすための教師の支援のあり方がわかった。

- ① (多様なめあて)・・・技の系統表を提示することで、一人ひとり、めあてが持てるようになり見通しをもった学習計画がもてる。
- ② (つまずき解決)・・・学習解決のための資料を準備することで、技の克服や達成に向けた思考する学習活動ができるようになる。
- ③ (個をささえる支援)・・・どこにつまずきがあるのか気づかせるように、タイミングのよい発問や助言で課題を自分のものとして意識し、「できる」ことへの意欲・学習につながる。学習の到達度がわかるように、技能達成一覧表を用意し、児童の実態の把握、学習の見通しへとつなげることで、意欲的になる。運動観察の視点を明確にすることによって、運動の理解を深め、試行錯誤して工夫するようになる。
- ④ (個を生かす評価)・・・学習カードへ、自己評価〈楽しさ・学び方・技能〉について文章で書かせることで一人ひとりの情意面をとらえ、児童理解が深められた。
- ⑤ (個と集団をささえる支援)・・・相互学習する場合は、共通の課題をもったグループ同士の関わりが有効な学習につながる事がわかった。

2 今後の課題

- (1) 個のめあてとグループのめあての調和を図るための工夫。
- (2) 集団跳び箱運動における、個と集団の相互学習をささえる支援や評価についてさらに研究を深めること。
- (3) 体育科の年間指導計画の見直しと内容の精選を図り、課題解決的な学習の積み重ねを通して、学び方の定着を図る。

《主参考文献》

文部省	『小学校 体育指導資料 新しい学力観に立つ 体育科の授業の工夫』		1995年
高橋健夫編著	『体育の授業を創る』	大修館書店	1995年
全国教育研究所連盟	『個を生かす教育の実践 上』	ぎょうせい	1996年
東京学芸大学付属世田谷小学校著	『個のよさが生きる授業』	東洋館出版社	1995年
高橋健夫 他	『学校の体育第51巻第4号～12号』	日本体育社	1998年
杉山 重利 他2名	『小学校体育「めあて学習」の進め方』	東洋館出版社	1998年